



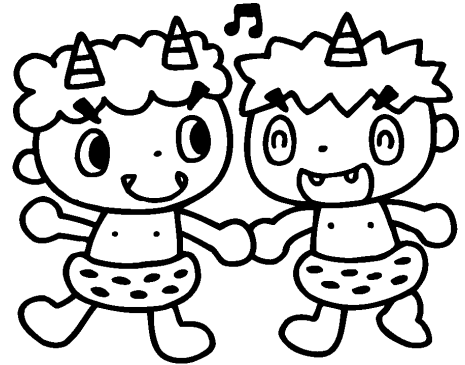
# ひよこだより



都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談  
令和6年2月7日 NO. 10

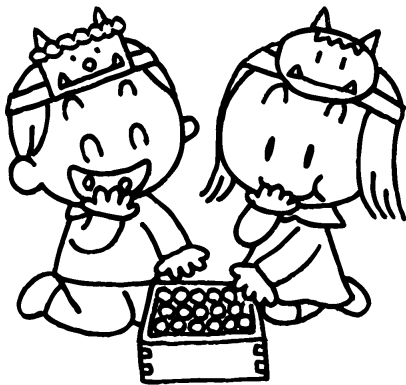
## もしもの時に備えて

東京でも厳しい冷え込みに霜柱が立ったり、水路に残った水溜まりに氷が張ったり、1年で最も寒い時期になりました。元日に発生した能登半島地震の被災地では、より厳しい寒さの中で、多くの方が避難生活を過ごされています。1日も早く安全で安心した生活が送られるようになることをお祈りします。そして、今回はこうした災害時に聴覚障害のある方々がどのような状況におかれやすいのか、またどんな備えをしておくかについて取り上げます。



日本では、これまでも大きな地震がたびたび起きてきました。日本で初めての近代的な大都市の直下を震源とする大地震は、1995年に起きた阪神淡路大震災です。兵庫県南部を中心に大きな被害と、発生当時、戦後最多となる死者を出す大災害となりました。そして、その被害をさらに上回ったのが2011年に起きた東日本大震災です。地震の規模も大きく(マグニチュード9.0)、発生した地域が広範囲に及んだこともあり、死者・行方不明者数は阪神淡路大震災の3倍以上となる2万人を超える大災害となりました。その9割近くが津波に巻き込まれて亡くなられた方たちです。その中で聴覚障害者の死亡率は全住民の1.7倍だったと言われています(NHK ハートネット「ろうを生きる 難聴を生きる」NHK 調査報告より)。ただ、この数字は障害者手帳を所持している方を対象とした調査結果です。障害者手帳のない軽中等度難聴の方を含めれば、さらに高い死亡率となることが推測されます。

聴覚障害者の死亡率が高くなってしまったのは、津波を知らせる防災無線の内容が聞こえず、津波から逃げ遅れてしまったことが原因のひとつと考えられています。人工内耳の方であっても、緊急地震速報に気が付くことができなかつたり、防災無線の内容を聞き取ることが難しかったりすると言われます。これは軽中等度難聴の方でも同様です。災害時に、避難に必要な情報を速やかに得ることができたかどうか、生死を分けることとなりました。



「天災」・「人災」という言葉があります。地震や津波、洪水等の自然現象によってもたらされる災害である「天災」は、防ぐことも避けることもできません。しかし、人の不注意や備えが不十分であったために起こる「人災」は、できる限りの事前の備えをすることで、その被害を小さく抑えたり、防いだりすることができます。災害情報をその地域の全ての人を受け取ることができるか、そして避難行動がとれるかどうかは、事前に対策が検討できる事柄です。行政の工夫が求められるとともに、私たちもいざという時のために、防災情報を得るための方法を

複数持っておくこと、そして子供たちの成長に合わせて、それらの使い方を教えていくことが命を守ることに繋がります。

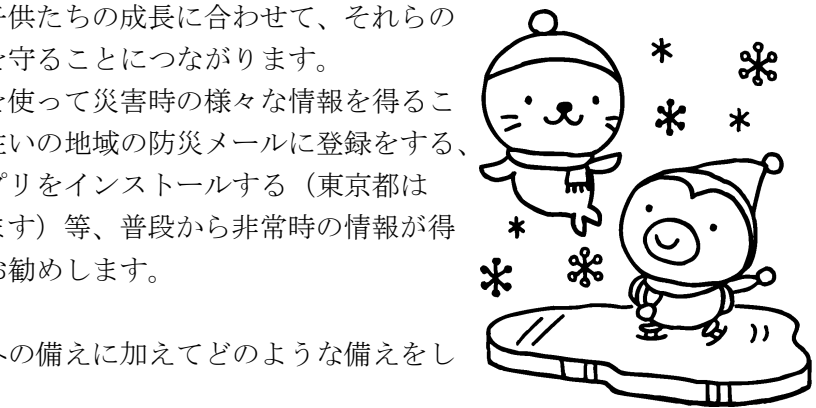
最近では、スマートフォンを使って災害時の様々な情報を得ることが多いかもしれません。お住いの地域の防災メールに登録をする、自治体が運営している防災アプリをインストールする（東京都は「東京都防災アプリ」があります）等、普段から非常時の情報が得られるようにしておくことをお勧めします。

その他には、一般的な災害への備えに加えてどのような備えをしておくのでしょうか。

まず、避難する時の持ち物には、補聴器や人工内耳の電池の予備を必ず入れておきましょう。今回の能登半島地震では補聴器会社等が無償で電池の配布を行っていますが、そのような物資がすぐに届くとは限りません。それほどかさばるものではありませんから、使用期限に気を付けて用意をしておきましょう。また防災用ホイッスルもあれば、救助を求める時に使えます。笛は電池切れの心配もなく、子供でも使うことができます。幼児にはまだ理解が難しいかもしれませんが、がれき等の下で身動きがとれなくなってしまった時など、ホイッスルを吹いたり、近くの物を叩いたりして音を出すことで、自分の居場所を外部の人に知らせることができることを子供達には教えていきたいですね。

また物の備えだけでなく、家の近所や周囲の人の中に、子供の聞こえについて知っておいてもらえる人間関係を作っておくことも大切です。家族以外にも理解者がいることで、避難の際に、警報やサイレン等がわかりにくい子供に個別に声をかけてもらえたり、避難先で必要な配慮や支援を得やすくなります。聴覚障害のある方は、避難所等でも情報から孤立したり支援情報に乗り遅れたりすることがあります。非常時はただでさえ不安なことが多くなります。そうした状況の中で、さらにコミュニケーションが取りにくい、または情報が得られないということになれば、さらに不安が高まり心身の健康状態を崩してしまうことにつながります。子供が幼い時から、近所の人とのコミュニケーションの中で聞こえないことについて少しずつ知ってもらうことで、いざという時にも援助を求めやすくなります。子供と一緒に、近所の人に会ったら挨拶をする、そんな一歩から始めてみてはいかがでしょうか。

障害者や高齢者に多くの犠牲者が出ってしまった東日本大震災の経験や教訓から「インクルーシブ防災」という考え方が広まってきています。障害のある人もない人も、高齢者も幼い子供も、あらゆる人の命を守る、誰も取り残さない防災を目指す理念や取り組みの事を言います。災害時に特に不利になる人のことを「災害弱者」と言われますが、これは障害のある人だけでなく高齢者や傷病者、妊婦さんや乳幼児、日本語の理解が十分でない外国籍の人、災害の起きた地域の地理に疎い観光客なども含まれます。これまでの防災や避難先での支援は、こうした多様な人々が存在し、その人それぞれに適切な防災や支援の方法があることへの理解が十分ではありませんでした。今回の震災を機に、まずは自分自身、そして家族の安全を守るための準備をできることから少しずつ心がけるとともに、地域のことを知る、避難・支援の際に多様な背景をもつ人がいることを知ることから、「誰も取り残さない防災」を一緒に始めましょう。



（担当：松澤）